

第27期定時株主総会招集ご通知における インターネット開示事項

連結持分変動計算書
連結計算書類の注記
株主資本等変動計算書
計算書類の注記

第27期（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

株式会社トリドールホールディングス

第27期定時株主総会招集ご通知に際して提供すべき書類のうち、上記の事項につきましては、法令及び当社定款の規定に基づき、当社ホームページ（<http://www.toridoll.com/>）に掲載することにより、株主の皆様提供しております。

連結持分変動計算書

(平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで)

(単位：百万円)

	親会社の所有者に帰属する持分				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素 在外営業活動体の換算差額
当期首残高	3,907	3,947	21,219	△0	662
当期変動額					
当期利益			5,631		
その他の包括利益					△545
当期包括利益合計	—	—	5,631	—	△545
新株の発行 (新株予約権の行使)	68	68			
株式報酬取引					
配当			△1,039		
連結範囲の変動					
支配が継続している子会社に対する所有持分の変動		△7			
所有者との取引額等合計	68	60	△1,039	—	—
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替			3		
当期末残高	3,975	4,007	25,813	△0	117

	親会社の所有者に帰属する持分				非支配持分	資本合計
	その他の資本の構成要素		合計			
	新株予約権	合計				
当期首残高	254	916	29,989	883	30,872	
当期変動額						
当期利益		—	5,631	△46	5,585	
その他の包括利益		△545	△545	△53	△598	
当期包括利益合計	—	△545	5,086	△99	4,987	
新株の発行 (新株予約権の行使)	△40	△40	95		95	
株式報酬取引	79	79	79		79	
配当		—	△1,039	△20	△1,059	
連結範囲の変動		—	—	33	33	
支配が継続している子会社に対する所有持分の変動		—	△7	7	—	
所有者との取引額等合計	39	39	△872	20	△853	
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	△3	△3	—		—	
当期末残高	291	408	34,203	804	35,006	

【 連結計算書類の注記 】

(連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等)

1. 連結計算書類の作成基準

連結計算書類は、会社計算規則第120条第1項の規定により、国際会計基準（以下、IFRS）に準拠して作成しております。なお、同項後段の規定により、IFRSで求められる開示項目の一部を省略しております。

2. 連結の範囲に関する事項

全ての子会社を連結しております。

連結子会社の数…………… 31社

主要な連結子会社の名称………… TORIDOLL USA CORPORATION
TORIDOLL KOREA CORPORATION
東利多控股有限公司
台湾東利多股份有限公司
GEORGE' S CORPORATION
TORIDOLL DINING CORPORATION
TORIDOLL DINING CALIFORNIA LLC
TDインベストメント株式会社
TORIDOLL CAMBODIA COMPANY LIMITED
NOM NOM ENTERPRISE LLC
WOK TO WALK FRANCHISE B. V.
WOK TO WALK INTERNATIONAL, SOCIEDAD LIMITADA
株式会社トリドール（旧・株式会社トリドール分割準備会社）
株式会社ソノコ
株式会社いなみ野ファーム
株式会社バルーン
株式会社トリドールD&I
TORIDOLL ITALIA S, R, L
その他13社

当連結会計年度において、新規設立により株式会社いなみ野ファーム、株式会社バルーン、株式会社トリドールD&I及びTORIDOLL ITALIA S, R, Lを、株式取得により株式会社ソノコを、それぞれ連結の範囲に含めております。また、TORIDOLL KENYA LIMITEDは株式譲渡により、連結の範囲から除外しております。

3. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した共同支配企業及び関連会社（以下「共同支配企業等」といいます。）の数及び主要な共同支配企業等の名称

持分法を適用した共同支配企業等の数…………… 32社

持分法を適用した主要な共同支配企業等の名称… NODU FOODS COMPANY LIMITED
TORIDOLL AND HEYI GROUP COMPANY LIMITED
丸龜製麵(香港)有限公司
上海東利多餐飲管理有限公司
北京東利多餐飲管理有限公司
UTARA 5 FOOD AND BEVERAGE SDN BHD
BOAT NOODLE SDN BHD
SAKAGURA UK LTD
SHORYU HOLDINGS LIMITED
その他23社

当連結会計年度において、新規設立によりSAKAGURA UK LTDを、株式取得により SHORYU HOLDINGS LIMITEDを、それぞれ持分法適用の範囲に含めております。

(2) 持分法の適用の手続について特に記載すべき事項

連結計算書類には、他の株主との関係等により決算日を当社の決算日に統一することが実務上不可能であるため、当社の決算日と異なる日を決算日とする持分法適用会社に対する投資が含まれております。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 棚卸資産

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のうち、いずれか小さい額で測定しております。棚卸資産の取得原価は、主として先入先出法に基づいて算定しております。

② 有形固定資産

有形固定資産は、原価モデルを適用し、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した額で測定しております。

取得原価には資産の取得に直接関連する費用が含まれております。

③ 無形資産及びのれん

無形資産は、原価モデルを適用し、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した額で測定しております。

(i) 個別取得した無形資産

個別取得した無形資産は、当初認識時に取得原価で測定しております。

(ii) 企業結合により取得した無形資産

企業結合により取得した無形資産は、取得日の公正価値で測定しております。

のれんは、取得価額から減損損失累計額を控除して測定しております。

④ 非金融資産の減損

棚卸資産及び繰延税金資産を除く、当社グループの非金融資産の帳簿価額は、期末日毎に減損の兆候の有無を判断しております。減損の兆候が存在する場合は、当該資産の回収可能価額を見積もっております。のれん及び耐用年数を確定できない、又は、未だ使用可能でない無形資産については、毎期、さらに減損の兆候を識別した場合には都度、減損テストを実施しております。

資産又は資金生成単位の回収可能価額は、使用価値と売却費用控除後の公正価値のうち、いずれか大きい方の金額としております。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間的価値及び当該資産に固有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて現在価値に割り引いております。資金生成単位については、他の資産又は資産グループのキャッシュ・インフローから概ね独立したキャッシュ・インフローを生成する最小の資産グループとしております。

企業結合により取得したのれんは、結合のシナジーから便益を得ると見込まれる資金生成単位へ配分しております。のれんが配分される資金生成単位については、のれんを内部管理目的で監視している最小単位となるように設定しております。

当社グループの全社資産は、独立したキャッシュ・インフローを生成しないため、全社資産に減損の兆候がある場合、全社資産が帰属する資金生成単位の回収可能価額を見積もっております。

減損損失は、資産又は資金生成単位の帳簿価額が回収可能価額を超過する場合に超過差額を純損益として認識しております。資金生成単位に関連して認識した減損損失は、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額しております。

のれんに関連する減損損失は戻入れておりません。のれん以外の資産については、過去に認識した減損損失は、期末日毎に、減損損失の戻入れの兆候の有無を評価しております。減損損失の戻入れの兆候がある場合には、回収可能価額の見積りを行い、当該回収可能価額が資産の帳簿価額を上回る場合には、減損損失を戻し入れております。減損損失は、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費又は償却費を控除した後の帳簿価額を超えない金額を上限として戻し入れております。

なお、共同支配企業に対する投資の帳簿価額の一部を構成するのれんは区分して認識していないため、個別に減損テストを実施しておりません。ただし、共同支配企業に対する投資が減損している可能性が示唆されている場合には、投資全体の帳簿価額について回収可能価額と比較することにより単一の資産として減損テストの対象としております。

⑤金融商品

非デリバティブ金融資産

金融資産は、当社グループが当該金融商品の契約当事者になった取引日に当初認識しております。

当社グループは、金融資産からのキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅した場合又は金融資産からのキャッシュ・フローを受取る契約上の権利を譲渡する取引において当該金融資産の所有にかかるリスクと経済価値のほとんどすべてを移転する場合には、当該金融資産の認識を中止しております。

(i)償却原価で測定する金融資産

金融資産は、以下の2つの要件を両方満たす場合、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

- ・当社グループの事業モデルにおいて、当該金融資産の契約上のキャッシュ・フローを回収することを目的として保有すること
- ・金融資産の契約条項が、特定された日に元本及び利息の支払いのみによるキャッシュ・フローを生じさせること

償却原価で測定する金融資産は、当初認識時に公正価値にその取得に直接起因する取引費用を加算して測定しております。また、当初認識後は、償却原価で測定する金融資産の帳簿価額については実効金利法を用いて算定し、必要な場合には減損損失を認識しております。

当社グループは、償却原価で測定する金融資産について、減損している客観的証拠が存在するか否かを期末日において検討しております。金融資産については、当初認識後に発生した1つ以上の事象の結果として減損の客観的証拠が存在する場合、かつ、その金融資産の見積将来キャッシュ・フローに影響を及ぼすことが合理的に予測できる場合に減損していると判定しております。

償却原価で測定する金融資産が減損していることを示す客観的な証拠には、債務者による支払不履行又は滞納、当社グループが債務者に対して、そのような状況でなければ実施しなかったであろう条件で行った債権の回収期限の延長、債務者又は発行企業が破産する兆候、活発な市場の消滅等が含まれております。

当社グループは、金融資産の減損の客観的な証拠を、個別に重要な金融資産については個々に、個別に重要でない金融資産については集团的に検討しております。

金融資産の減損の客観的な証拠がある場合には、当該損失の金額を、当該資産の帳簿価額と、見積将来キャッシュ・フローを当該金融資産の当初の実効金利で割引いた現在価値との間の差額として測定しております。当該資産の帳簿価額は、貸倒引当金勘定を通じて減額するとともに、当該損失額は純損益として認識しております。その後、当該資産の回収不能が確定した場合には、貸倒引当金を帳簿価額から直接減額しております。減損を認識した後に発生した事象により減損損失の額が減少した場合には、以前に認識した減損損失を純損益として戻し入れております。

(ii) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

当社グループは、償却原価で測定される金融資産に分類されなかった金融資産で、当初認識時に、当初認識後に認識される公正価値の変動をその他の包括利益で表示することを選択した資本性金融商品をその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定しております。

当該金融資産の認識を売却等により中止する場合には、認識されていた累積利得又は損失を、その他の資本の構成要素から利益剰余金に振り替えております。

(2) 重要な減価償却資産・償却資産の減価償却・償却の方法

有形固定資産……………有形固定資産項目は、その資産が使用可能となった日から、減価償却しております。減価償却費は、償却可能額をもとに算定しております。償却可能額は、資産の取得価額から残存価額を差し引いて算出しております。

減価償却は、有形固定資産の各構成要素の見積耐用年数にわたり、主として定額法に基づいて認識しております。有形固定資産の見積耐用年数は、予想される使用量、物理的自然減耗、技術的又は経済的陳腐化等を総合的に勘案して見積っております。事業用定期借地契約に係る借地上の建物については、残存価額を零とし、契約残存年数を基準とした定額法によっております。また、リース資産は、リース契約の終了時まで当社グループが所有権を獲得することが合理的に確実な場合を除き、リース期間又は経済的耐用年数のいずれか短い期間で償却しております。なお、土地は償却しておりません。

主な見積耐用年数は次のとおりであります。

- ・建物及び構築物 3～35年
- ・工具、器具及び備品 3～20年

減価償却方法、耐用年数及び残存価額は、期末日毎に見直しを行い、必要に応じて改定しております。

無形資産……………償却費は、償却可能額をもとに算定しております。償却可能額は、資産の取得価額から残存価額を差し引いて算出しております。

無形資産の償却は、その資産が使用可能となった日から見積耐用年数にわたり、定額法に基づいて認識しております。

主な見積耐用年数は次のとおりであります。

- ・ソフトウェア 5年
- ・フランチャイズ契約 9年
- ・顧客関連資産 10年

償却方法、耐用年数及び残存価額は、期末日毎に見直しを行い、必要に応じて改定しております。

また、耐用年数を確定できない無形資産は、取得原価から減損損失累計額を控除した額で測定しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

引当金は、過去の事象の結果として、当社グループが、合理的に見積り可能である法的又は推定的債務を有しており、当該債務を決済するために経済的資源の流出が生じる可能性が高い場合に認識しております。

引当金は、見積将来キャッシュ・フローを貨幣の時間的価値及びその負債に特有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて現在価値に割り引いております。

(4) 外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

①外貨建取引の換算

外貨建取引は、取引日における為替レートでグループ企業の各機能通貨に換算しております。期末日における外貨建貨幣性資産・負債は、期末日の為替レートで機能通貨に再換算しております。貨幣性項目にかかる為替差損益は、期首における機能通貨建ての償却原価に当期中の実効金利及び支払いを調整した金額と、期末日の為替レートで換算した外貨建償却原価との差額であります。外貨建取得原価により測定されている非貨幣性項目は、取引日の為替レートで換算しております。

②在外営業活動体の換算

在外営業活動体の資産及び負債は、取得により発生したのれん及び公正価値の調整を含め、期末日の為替レートで換算しております。また、在外営業活動体の収益及び費用は、取引日の為替レート又はそれに近似するレートで換算しております。換算により生じた差額は、その他の包括利益で認識しております。

在外営業活動体の一部又はそのすべてが処分される場合には、在外営業活動体の換算差額は、処分にかかる損益の一部として純損益に振り替えております。

(5) 収益の認識基準

収益は、受領する対価の公正価値から、値引、割戻及び売上関連の税金を控除した金額で計上しております。当社グループは、主としてサービスの提供により収益を獲得しております。サービスの提供からの収益は、以下の要件をすべて満たした時点で認識しております。

- (a) 収益の額を、信頼性をもって測定できること
- (b) その取引に関する経済的便益が企業に流入する可能性が高いこと
- (c) その取引の進捗度を、報告期間の末日において信頼性をもって測定できること
- (d) その取引について発生した原価及び取引の完了に要する原価を、信頼性をもって測定できること

当社グループの主なサービスの提供は、顧客からの注文に基づく料理の提供であり、顧客へ料理を提供し、対価を受領した時点で収益を認識しております。

(6) その他連結計算書類作成のための重要な事項

消費税等の会計処理…… 税抜方式を採用しております。

(会計方針の変更に関する注記)

会計方針の変更により新たに適用している基準書及び解釈指針

基準書	基準名	新設・改訂の概要
IAS第1号	財務諸表の表示	財務諸表の表示及び開示の明確化
IAS第16号	有形固定資産	減価償却の許容される方法の明確化
IAS第38号	無形資産	償却の許容される方法の明確化

この基準の適用が、当社グループの連結計算書類に与える重要な影響はありません。

(連結財政状態計算書に関する注記)

1. 資産から直接控除された貸倒引当金
 営業債権及びその他の債権 69百万円
 その他の金融資産 208百万円
2. 資産に係る減価償却累計額 (減損損失累計額を含む) 28,693百万円

(連結持分変動計算書に関する注記)

1. 当連結会計年度末の発行済株式の種類及び総数
 普通株式 43,380,200株

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決 議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基 準 日	効力発生日
平成28年5月12日 取締役会	普通株式	1,039	24.00	平成28年3月31日	平成28年6月13日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

決 議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基 準 日	効力発生日
平成29年5月15日 取締役会	普通株式	利益剰余金	1,128	26.00	平成29年3月31日	平成29年6月12日

3. 当連結会計年度末の新株予約権 (権利行使期間の初日が到来していないものを除く。)の目的となる株式の種類及び数
 普通株式 272,900株

(金融商品に関する注記)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融リスク管理の概要は、以下のとおりであります。

当社グループの金融商品に対する取組みは、資金運用は短期的な預金等に限定し、資金調達については主として銀行等金融機関からの借入により行う方針であります。

また、デリバティブ取引については、借入金の金利変動リスクを回避するための金利スワップ取引に限定し、投機的な取引は行わない方針であります。

当社グループは、金融商品にかかる以下のリスクを負っています。

- ・信用リスク ((3) 参照)
- ・流動性リスク ((4) 参照)
- ・金利リスク ((5) 参照)

(2) リスク管理フレームワーク

当社グループのリスク管理フレームワークの確立及び監督については、取締役会が全責任を負っております。取締役会は、当社グループのリスク管理方針を策定し監視する責任を負う、リスクマネジメント委員会を設立しております。当該委員会は、その活動について定期的に取締役会に報告しております。

当社グループのリスク管理方針は、当社グループが直面しているリスクを識別・分析し、適切なリスクの上限及びコントロールを決定し、また、リスクとその上限の遵守を監視するように策定されております。当社グループは、市場の状況及び当社グループの活動の変化を反映するため、リスク管理方針及びシステムを定期的に見直しております。当社グループは、研修、管理基準及びその手続きを通じて、すべての従業員が個々の役割と義務を理解する、統制のとれた建設的なコントロール環境を発展させることを目標としております。

当社グループの監査等委員会は、当社グループのリスク管理方針及び手続きの遵守状況を経営陣がどのように監視しているかを監督し、当社グループの直面しているリスクに関連するリスク管理フレームワークの妥当性をレビューしております。当社グループの監査等委員会は、監督を遂行するにあたって内部監査からの支援を受けております。内部監査は、リスク管理コントロール及び手続きの定期的及び臨時的レビューを行い、その結果を監査等委員会に報告しております。

(3) 信用リスク

信用リスクとは、顧客、又は金融商品の取引相手が契約上の義務を果たすことが出来なかった場合に当社グループが負う財務上の損失リスクであり、主に当社グループの顧客及び店舗の貸借人からの債権から生じます。

当社の営業債権、敷金・保証金及び建設協力金は、取引先の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社は与信管理規程に基づき総務部を主管部門とし、主な取引先の信用状況について、定期的に把握する体制をとっております。また、連結子会社についても、当社の与信管理規程に準じた管理を行っております。

(4) 流動性リスク

流動性リスクとは、当社グループが現金又はその他の金融資産により決済する金融負債に関連する債務を履行する際に、困難に直面するリスクのことであります。

当社グループは、営業債務や借入金について適時に資金繰計画を作成・更新することなどにより、流動性リスクを管理しております。

(5) 金利リスク

当社グループは出店のための資金を主に銀行借入により調達するほか、店舗の賃借によるリース債務によって賄っております。

現在は、主に、固定金利の長期借入金により資金を調達しているため、短期的な金利の変動が当社グループの純損益に与える影響は軽微であります。

2. 金融商品の公正価値等に関する事項

(1) 公正価値及び帳簿価額

金融資産・負債の公正価値及び連結財政状態計算書に示された帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	帳簿価額	公正価値	差額
償却原価で測定する金融資産			
現金及び現金同等物	11,183	11,183	—
営業債権及びその他の債権	3,697	3,697	—
その他の金融資産	10,163	11,144	981
合計	25,042	26,023	981
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産			
その他の金融資産	145	145	—
合計	145	145	—
償却原価で測定する金融負債			
営業債務及びその他の債務	6,867	6,867	—
短期借入金	24	24	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを含む)	11,755	11,817	62
リース債務 (1年以内に返済予定のものを含む)	3,928	4,579	652
合計	22,574	23,288	713

(2) 公正価値を算定する際に適用した方法

(a) 現金及び現金同等物、営業債権及びその他の債権

これらは短期間で決済されるため、公正価値は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(b) その他の金融資産

償却原価で測定する金融資産は、主として、敷金及び保証金、建設協力金により構成されており、これらの時価について、元利金（無利息を含む）の合計額を、新規に同様の差入を行った場合に想定される利率で割引いた現在価値により算定しております。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産は、非上場有価証券により構成されており、報告期間末に入手可能なデータ等を勘案し公正価値を算定しております。

(c) 営業債務及びその他の債務、短期借入金

これらは短期間で決済されるため、公正価値は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(d) 長期借入金、リース債務

これらの時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借入れ、又は、リース取引を行った場合に想定される利率で割引いた現在価値により算定しております。

(1株当たり情報に関する注記)

- | | |
|---------------------|---------|
| (1) 1株当たり親会社所有者帰属持分 | 788円44銭 |
| (2) 基本的1株当たり当期利益 | 129円89銭 |

(減損損失に関する注記)

有形固定資産

当社グループは、営業活動から生ずる損益が著しく低下した店舗について、当連結会計年度は663百万円の減損損失を認識しました。当社グループは、キャッシュ・フローを生み出す最小単位として店舗を基本単位として資産グルーピングを行っております。

営業活動から生ずる損益が著しく低下した店舗については、当該店舗の資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。

当該店舗の資産グループの回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローを5.7%~13.41%で割引いて算定しております。

なお、当該店舗の資産グループにおける割引前将来キャッシュ・フローの総額がマイナスとなったものについて、帳簿価額全額を減損損失として計上しております。

(重要な後発事象に関する注記)

株式取得による会社等の買収

当社は、平成29年5月15日開催の取締役会において、香港で飲食事業を営むJOINTED-HEART CATERING HOLDINGS LIMITED (以下、「JHCHL」という。)の発行済株式の全株を当社子会社である東利多控股有限公司を通じて取得し子会社化することを決議いたしました。

また、同日付で下記のとおり株式譲渡契約を締結いたしました。

(1) 株式取得の目的

当社グループは、マルチポートフォリオ戦略のもと、世界各国に店舗を展開しておりますが、事業成長のスピードを更に加速するため、アジアにおける丸亀製麺の次の柱となる業態を育成したいと考えております。

JHCHLが運営する「譚仔雲南米線」は、香港において若者を主要ターゲットとした、近年成長が著しいスパイシー麺の人気チェーンであり、香港における店舗運営の実績・ノウハウを有しております。

今般のJHCHLの子会社化により、相乗効果を発揮でき、中国(香港を含む)市場での事業拡大が図れるものと判断し、JHCHLの株式取得を決定いたしました。

(2) 株式取得の相手会社の名称

MUSWELL INTERNATIONAL LIMITED

(3) 取得する株式に係る会社の名称、事業内容、規模

①名称	JOINTED-HEART CATERING HOLDINGS LIMITED
②事業内容	飲食事業
③規模	(平成28年3月期)
資本金	10千香港ドル
連結純資産	156,883千香港ドル
連結総資産	432,836千香港ドル
連結売上高	694,737千香港ドル
連結純利益	96,307千香港ドル

(4) 株式取得の時期

平成30年2月予定

(5) 取得する株式の数、取得価額及び取得後の持分比率

①取得する株式の数	10,000株
②取得価額	1,000百万香港ドル
③取得後の持分比率	100.00%

取得価額は契約に基づく調整を行った上で確定される予定です。

(注)連結計算書類の記載金額は、百万円未満を四捨五入して表示しております。

株主資本等変動計算書

(平成28年4月1日から
平成29年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株 主 資 本								
	資本金	資 本 剰 余 金		利 益 剰 余 金			自 己 株	株主資本合計	
		資 本 準備金	資本剰余金合計	利 益 準備金	その他利益剰余金				利益剰余金合計
					別 途 積立金	繰越利益剰余金			
当 期 首 残 高	3,927	3,985	3,985	8	13,379	6,952	20,338	△0	28,251
当 期 変 動 額									
新 株 の 発 行	68	68	68						135
剰余金の配当						△1,039	△1,039		△1,039
当 期 純 利 益						4,747	4,747		4,747
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)									
当 期 変 動 額 合 計	68	68	68	－	－	3,708	3,708	－	3,842
当 期 末 残 高	3,995	4,053	4,053	8	13,379	10,659	24,046	△0	32,093

	新 株 予約権	純資産合計
当 期 首 残 高	254	28,505
当 期 変 動 額		
新 株 の 発 行		135
剰余金の配当		△1,039
当 期 純 利 益		4,747
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	36	36
当 期 変 動 額 合 計	36	3,879
当 期 末 残 高	291	32,384

【 計算書類の注記 】

(重要な会計方針に係る事項に関する注記)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

関係会社株式……………移動平均法に基づく原価法を採用しております。

その他有価証券

時価のあるもの……決算日の市場価格等に基づく時価法を採用しております。

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの……移動平均法に基づく原価法を採用しております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっております。

(1) 原材料……………最終仕入原価法

(2) 貯蔵品……………最終仕入原価法

3. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産……………定額法を採用しております。

(リース資産を除く)

無形固定資産……………ソフトウェア(自社利用)

社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

リース資産……………所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年3月31日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

長期前払費用……………定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

貸倒引当金……………債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金……………従業員の賞与支給に備えるため、将来の支給見込額のうち当期の負担額を計上しております。

店舗閉鎖損失引当金……店舗の閉店に伴い発生する損失に備えるため、閉店を決定した店舗について、将来発生すると見込まれる損失額を計上しております。

5. 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

6. 消費税等の会計処理

税抜方式を採用しております。

(追加情報)

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日)を当事業年度から適用しております。

(貸借対照表に関する注記)

1. 有形固定資産の減価償却累計額	24,693百万円
2. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務	
短期金銭債権	5,950百万円
長期金銭債権	2,734百万円
短期金銭債務	2,000百万円

(損益計算書に関する注記)

平成28年10月1日付で会社分割を行い持株会社体制へ移行し、子会社である株式会社トリドールとの間で原材料の販売や店舗管理の業務委託、不動産の利用契約等を締結しております。これにより、同日以降の同社からの収入を「売上高」に計上するとともに、これらに対応する費用は、「売上原価」に計上しております。

関係会社との取引高	
売上高	33,076百万円
営業取引以外の取引による取引高	37百万円

(株主資本等変動計算書に関する注記)

当事業年度末における自己株式の種類及び株式数	
普通株式	9株

(税効果会計に関する注記)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)	
賞与引当金	22百万円
未払事業税	47百万円
減価償却費	399百万円
減損損失	979百万円
資産除去債務	344百万円
リース資産	702百万円
未払金	183百万円
貸倒引当金	362百万円
その他	167百万円
繰延税金資産小計	3,206百万円
評価性引当額	△394百万円
繰延税金資産合計	2,811百万円
(繰延税金負債)	
資産除去債務に対応する除去費用	123百万円
リース債務	612百万円
その他	0百万円
繰延税金負債合計	735百万円
繰延税金資産の純額	2,076百万円

(注) 繰延税金資産及び繰延税金負債の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれています。

流動資産－繰延税金資産	290百万円
固定資産－繰延税金資産	1,786百万円

(リースにより使用する固定資産に関する注記)

貸借対照表に計上した固定資産のほか、店舗用建物の一部については、所有権移転外ファイナンス・リース契約により使用しております。

(関連当事者との取引に関する注記)

子会社及び関連会社等

(単位：百万円)

属性	会社等の名称	議決権の所有割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
子会社	株式会社トリドール	直接100%	役員の兼任	店舗管理及び事務委託等(注1)	32,882	営業未収入金	4,025
				資金の預り(注2)	2,000	預り金	2,000
				会社分割 分割資産合計 分割負債合計(注3)	1,884 1,884	—	—
子会社	株式会社ソノコ	直接100%	資金の援助	資金の貸付(注4)	690	短期貸付金	690
子会社	TORIDOLL DINING CALIFORNIA LLC	間接100%	資金の援助	資金の貸付(注4)	451	長期貸付金(注5)	1,119

1. 平成28年10月1日に持株会社体制への移行に伴い、当社の商号を「株式会社トリドール」から「株式会社トリドールホールディングス」に変更しております。また、同日付で「株式会社トリドール分割準備会社」の商号を「株式会社トリドール」に変更しております。

2. 取引条件及び取引条件の決定方針等

(注1) 「親子間基本契約」に基づき、発生した実費に手数料を加えて請求しております。

(注2) 子会社における余剰資金を回収したものであります。

(注3) 平成28年4月12日付分割契約書に基づき、株式会社トリドールホールディングスが営んでいた飲食事業に関連する資産及び負債を株式会社トリドールに承継しております。

(注4) 資金の貸付については、市場金利を考慮して利率を合理的に決定しており、担保は受け入れておりません。

(注5) TORIDOLL DINING CALIFORNIA LLCへの長期貸付金に対し、701百万円の貸倒引当金を計上しております。また、当事業年度において144百万円の貸倒引当金繰入額を計上しております。

(1株当たり情報に関する注記)

- | | |
|-----------------|---------|
| 1. 1株当たり純資産額 | 739円82銭 |
| 2. 1株当たり当期純利益金額 | 109円50銭 |

(減損損失に関する注記)

当社は、以下の資産グループについて減損損失を計上いたしました。

用 途	種 類	場 所	減 損 損 失 (百万円)
店舗用設備等 (国内25店舗)	建物、構築物、 工具、器具及び備品、 リース資産	千葉県船橋市 他	536

当社は、キャッシュ・フローを生み出す最小単位として店舗を基本単位としております。

営業活動から生ずる損益が著しく低下した店舗については、当該店舗の資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失(536百万円)として特別損失に計上いたしました。当該店舗の資産グループの減損損失の内訳は、建物442百万円、構築物8百万円、工具、器具及び備品79百万円、リース資産6百万円であります。

当該店舗の資産グループの回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローを5.7%で割引いて算定しております。なお、当該店舗の資産グループにおける割引前将来キャッシュ・フローの総額がマイナスとなったものについては、帳簿価額全額を減損損失として計上しております。

(企業結合に関する注記)

(共通支配下の取引等)

1. 取引の概要

①対象となった事業の名称及び事業内容

当社の飲食事業

②企業結合日

平成28年10月1日

③企業結合の法的形式

当社を吸収分割会社、株式会社トリドール分割準備会社を吸収分割承継会社とする吸収分割であります。

④結合後企業の名称

当社は平成28年10月1日付で「株式会社トリドールホールディングス」に商号変更しております。また、株式会社トリドール分割準備会社は同日付で「株式会社トリドール」に商号変更しております。

⑤その他取引の概要に関する事項

当社グループは、『すべては、お客様のよろこびのために。』を経営理念に掲げ、「できたて、本物のおいしさを、すべてのお客様へ」の思いを原点に、それぞれの地域一番店を目指して、邁進してまいりました。今後も国内基盤をさらに強固なものとし、主力の丸亀製麺業態を牽引役に、継続的な成長を実現するとともに、新業態の開発や海外展開を積極化するなど、果敢な挑戦を継続し、複数の成長軸を持つグローバル企業へと成長してまいりたいと考えております。

このような状況の下、当社グループは、従業員一丸となって、お客様のよろこびの最大化を実現するため、より一層の経営の効率化を図り、市場環境の変化に柔軟に対応出来る体制づくりが必要と考え、持株会社体制への移行のため、本件分割を実施いたしました。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 平成25年9月13日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 平成25年9月13日)に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(注) 計算書類の記載金額は、百万円未満を四捨五入して表示しております。